

一次世界大戦が始まると、一層生活は苦しくなる。下宿屋をやったり、インディアン芸術を模した陶器を焼いて売るなどして口すぎとした。こうして芸術活動の休止状態が十五年も続く。長い不運の星霜であった。

転機は一九二七年、エミリー五十六歳にして訪れた。ハロルド・ラムという男が、インディアン芸術を東部に紹介するため現れ、彼女の作品に目をとめたのである。作品がトロントに送られ、東部画壇で活動していた七人グループとの交流が始まる。特に、キュービズムの傾向をもつローレン・ハリスからは、啓示的影響を受けることになった。

ハリスは、技法よりも芸術家の内面的態度を重視してエミリーを激励した。これを受けて彼女は「形、色、構成が優れていても、人の心を打たない作品は価値がない」と当時の日記に残している。

この時期の作品に、ハリスが絶賛し、



「ヘイナ」 The National Gallery of Canada, Ottawa



「クリアリング」 The National Gallery of Canada, Ottawa

これ以上の作品は描けまいと言ってエミリーを怒らせた「インディアン教会」がある。ピロードの幕を幾片も垂れたような森を背景にした白い教会堂は、見る人の心に迫るものを持っている。

やがて対象はインディアンから森そのものへと移る。インディアン主題は、人類学的関心から珍重されるため、芸術的良心にそぐわなくなっていた。一方、森は、永遠の神秘をたたえて彼女の身近にあった。彼女は愛犬を連れて森の中に入り、何日もかかって森を描きつづけた。

「グレー」は、若木を中心とした森のテーマを、光と暗のドラマチックな構成により歌い上げた傑作の一つである。森の上に空を見出した一九三〇年代の

作品では、広い空間が主役となり、その空間を僅かによぎる木々の梢は前景にすぎない。エミリーは、神を模索するかのよう空間に多くの円を描いている。シヤドポールトは語る。「エミリーは、林や野原や空や海岸から生命力を見出し、動きを表現する中に、新しい自由を求めたのだ」と。

一九世紀のケベックにおいて、つとにインディアン生活を描いたオランダ生れの画家クリークホッフの、あの冷めた写真の目と比べると、自らの国土の自然に魂を求めて描きつづけたエミリー・カーにおける、そのアイデンティティの確かさを思わずにはいられない。

最後に、評者としてこの書に望む余地は殆どないが、欲を言えば、修業時代のデッサン、とくに周囲の人物をシニカル



「森の風景II」 The National Gallery of Canada, Ottawa

な目で捕えた作品も（あるはずだが）加えてほしかった。

The Art of Emily Carr, by Doris Shadbolt (Clarke, Irwin / Douglas & McIntyre, 1979)

編集後記

〇久しぶりにカナダ文化特集をお送りします。多民族からなる若い国であり、しかもアメリカという大国が隣りに控えるカナダにとって、独自の文化を築くことは、「カナダ人とは何か」というアイデンティティの問題とも深くかかわる大きな国民的課題です。カナダを代表する文芸評論家ノースロップ・フライおよびジョージ・ウッドコックのカナダ文化論、ジャック・ホッジンスのカナダ文学論からそれを汲みとっていただきたいと思えます。

〇カナダ的アイデンティティを求める努力は、すでにある部分では大きな成果を上げています。ホッジンスらのコメントにもそれがよく現われていますし、ホッジンス自身の作品、グループ・オブ・イレブンの絵画、あるいはエミリー・カーの作品にも、カナダ的なるものが強く感じられます。

〇論文コンテストの作品は今号も掲載を見送らざるを得ませんでした。次号までお待ち下さい。

〇当広報部では、カナダの大学または研究機関で勉強・研究したことのある方々の名簿作りをしております。ご本人はもちろんのこと、心当りのある方は、ぜひ広報部の永野までご一報下さいませよう、ご協力をお願いします。（吉田）

本紙中の意見や見解は、必ずしもカナダ政府またはカナダ大使館の考え方を反映するものではありません。また公式分書の翻訳は仮訳です。転載の際は、できるだけ出典を明らかにして下さい。ご意見やご希望は左記の住所にご連絡下さい。

〒107東京都港区赤坂七丁目三三三八

カナダ大使館広報部